

地に親しむ暮らし ～郊外住宅地金沢の水と緑の地域資源活用計画～

都市空間生成研究室
1841149 三上 莉音

金沢区 地域資源	郊外住宅地 自然環境	都市デザイン 空間共有
-------------	---------------	----------------

1. 研究の背景と目的

横浜市金沢区には豊かな自然環境があり、近代初めには南関東有数の景勝地として知られ、遊楽地・別荘地として栄えていた。しかし、戦争による軍需工場の進出や、中心市街地の再開発に伴い広大な範囲の埋め立てが行われ、自然豊かな景観美は犠牲になった。同時に、金沢に住む人々の暮らしも徐々に変化していった。そして、現在も横浜市では再開発が各地ですすめられている。このままなんとなく住み続けていては、現在まだ残っている金沢の豊かな景観が更に失われてしまうことが予想される。

時代と共に変化した金沢の自然環境と人々の暮らしに着目し、地域資源を活かした豊かな暮らしの風景を作り出す計画を立案し、今後の金沢の在り方を提案することが本計画の目的である。

2. 金沢区の地域特性

2-1. 金沢区の歴史的背景

金沢は鎌倉幕府の金沢北条氏の拠点として、また幕府の海運の拠点として栄えた。その後、江戸時代後期に歌川広重によって描かれた金沢の 8 つの勝景をあてはめた「武州金沢八景」八連作(図 1)と、心越禅師が詠んだ 8 編の漢詩が、景勝に恵まれた保養・遊覧の地として金沢を世に広めた。そして主要幹線東海道の近接地として、鎌倉とともに旧跡・名所と意識され、多くの文人が訪れ南関東有数の景勝地として、さまざまな寄稿文や詩歌に記されるようになる。明治時代には、東京から多くの観光客も訪れ、この地に別荘を持ち、休日を楽しもうとする人が多くいた。また、東京・横浜の食糧庫・燃料庫として、江戸時代から引き続いて農業・漁業・塩業が盛んに行われていた。

しかし、昭和に入ると、横須賀軍港や国際港横浜の後背地として急激に都市化が進む。戦後には、横浜市 6 大事業の 1 つとして金沢沿岸部の埋め立てが行われた。その後、海の公園・八景島造成、シーサイドライン開通等を経て、現在の金沢の姿が出来上がった。



図 1 歌川広重が描いた称名晩鐘と乙舳帰帆

2-2. 地形の変化に伴う生活の変化

海に面し自然豊かであった金沢の主産業は、漁業や農業であった。そのため、自然と共に暮らす人々の姿があった。また、景勝として名高く、自然豊かで美しい景観を持っていた金沢には、旅館や別荘ができ、観光業も栄えていた。しかし、その後沿岸部の埋め立てが行われて広範囲の海面が失われ、漁業に大きな打撃を与えた(図 2)。また、住宅地化が進む中で海と同時に緑も失われ農業も打撃を受けた。時代の流れと共に徐々に美しい風景が失われ、旅館などの観光地的要素も衰退していった。そして、郊外住宅地が出来上がり、自然景観や地の特徴を活用し暮らす、豊かな風景が薄れていった。

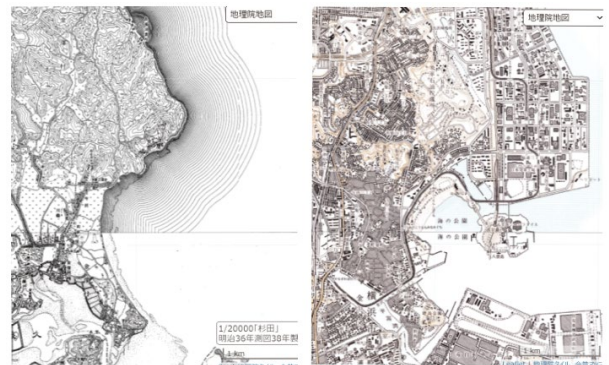


図 2 金沢の地理院地図(左明治 36 年・右平成 13 年)

2-3. 金沢区の課題

郊外住宅地化によって金沢らしさが失われた。そこに横浜近郊の交通の便の良さや暮らしやすさを求めて、新規住民が移住してきた。その人たちが金沢の地域資源に親しまず住んでしまうことで、金沢に残っている魅力を今後引き継ぐ人がいなくなる。そうすることで、魅力や特徴のない郊外住宅地になる恐れがあると考えられる。

2-4. 計画のビジョン

金沢にかつてあった豊かな暮らしの風景を生み出した。豊かな暮らしの風景は、物的な景観だけでなく、人々の活動を含めた風景であると考え。それぞれが自由に地の特徴を活かした活動しているという元あった風景と、今の金沢だから生まれる新たな活動を組み合わせることで新しい金沢の豊かな暮らしの風景をつくりだす。

3. 計画内容

3-1. 計画コンセプト

本計画のコンセプトは「地に親しむ暮らし」。日々の暮らしの中で自然に接する時間ができるよう、柴シーサイドファーム下の広場、工業地帯の緑道沿い、柴漁港、海岸沿いの4つを拠点に計画を行う(図3)。本計画で重要なことは、空間を誰かと共有できるようにすることである。今まで閉鎖的になってしまっていた豊かな活動を共有することで、活動領域が拡張し地の特徴を活かした暮らしが街全体に広がることを目指す。



図3 計画全体プログラム

3-2. 計画詳細

①柴シーサイドファーム下の広場

日当たりの良い広場に、大きなプランターや手洗い場を設置し、農業体験エリアをつくる(図4)。また、ベンチなどを設置し休憩できるスペースも設ける。家でも土に触れたり、作業をしている人を眺めながら食事できるよう、苗や種販売とレストランを併設した建物も建設する。様々な用途を加えることで、多様な活動が生まれる。

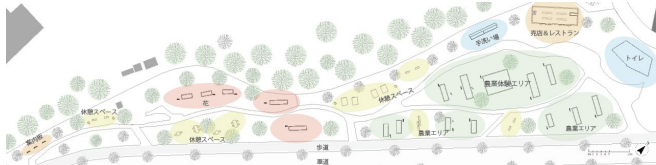


図4 広場の平面図

②工業地帯の緑道沿い

緑道沿いは道幅が広いので、緑道沿いにプランターを設置する。住民の手によってこの道を整備することで愛

着のわく通りになる。また、ベンチや机なども置き、働く人や学生が休憩時間などに留まれる空間にする(図5)。

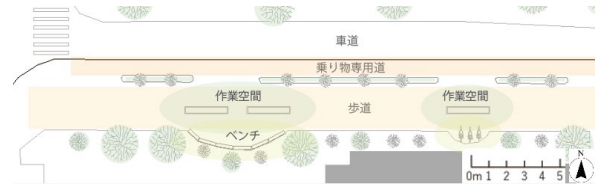


図5 緑道平面図

③柴漁港

柴漁港は漁業を昔から現在まで繋いでいる場所であるが、建物に囲まれ閉鎖的になっている。そのため、囲っている建物を減らし外から中の様子が見えるようにし、柴漁港の中心に新たに建築物を建設する(図6)。そこには元からあった、柴漁港で取れた魚を使った定食屋と新鮮な魚の直売所を移し新たな賑わい空間をつくる。

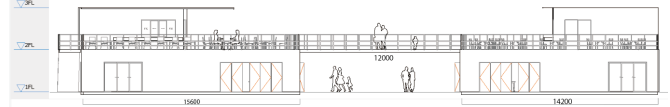


図6 建物立面図

④海岸沿い

海岸沿いは多くの釣り人の姿があった。海と空が見渡せる立地であるため、高さのある芝生の丘を設置する。そうすることで、寝転がったりピクニックをしたりしながら釣りをしている人の姿と美しい景色を眺めることができる。また、既存の堤防に高台を設置することで、新たな視点で釣りを楽しむことができる空間となる(図7)。

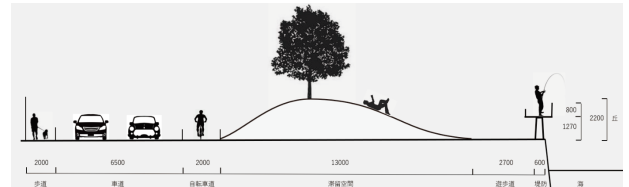


図7 海岸沿い高台設置エリアの断面図

3-3. 計画後の金沢

1つのエリアに様々な用途を加えることで、違う目的を持った人が同じ空間を訪れる。活動が限定されてしまうものを加えるのではなく、緩い仕掛けを加えることによって、その特徴を使って自由な活動が生まれることを促進する。個々で活動していた人を同じ空間で受け止めることによって、お互いが他者を認知し、視野や活動領域が広がる。そしてその後、金沢の各地に自発的に豊かな活動が生まれることで、最終的に金沢が豊かになる。

参考文献

- 「横浜市ホームページ」、
<https://www.city.yokohama.lg.jp/kanazawa/shokai/rekishi/ikizuku/jidai/age.html>、(最終閲覧日: 2022.01.22)
- 金沢区・市制100周年・区政40周年記念事業実行委員会出版部会(1989.3)『翔べ金沢 太陽と潮騒と緑の丘』金沢区記念事業実行委員会